

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを断ち切る生き方ではなく、内に深く悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

六 七 日

1. あの人はどこに

七日参りも六回目あたりになると、「うちのおじいちゃんは、今、どこにいるのでしょうか？」と尋ねられたりします。はっきりと質問の言葉にならずとも、「自分の大切な人は、今、どうなったのだろう」という思いを感じることも多いです。それは即得成仏といって、大切な人はすぐに仏様に成ったというのだから、仏様に成ったのだろうと思うが、得心がいかないようです。この一ヶ

月以上も仏壇に向かって手を合わせてきたが、仏壇の奥には阿弥陀様の姿だけです。私の大切な人はどこでどんな姿の仏様に成ったのだろうかという問いかけです。

今、仏教は死者と生者の関係を語らねばならない時代にいる、という文章を読んだことがあります。死者の在りように対して、土俗的あるいは民俗学的な説明では通用しない時代に入ったと言います。私は、お参りをされていて、そのような状況を

実感しています。仏壇の前で手を合わせている人たちは、自分の大切な人がどのような仏様に成ったのか、という説明を求めています。

2. 仏身論

私は、仏の在り方を仏身論という概念で説明ができるのではないかと思います。古来、仏教では仏様の有りようについて考えをめぐらせてきました。特に、大乘仏教では仏様の在り方について深く考えられてきました。南方仏教では、仏というとお釈迦様をさします。仏教徒はそのお釈迦様に帰依をするのです。キリスト教を精神的背景とする社会で暮らす欧米の人々は、大乘仏教の仏より南方仏教でのブッダが理解しやすいように思います。

紀元前後頃から始まった大乘仏教は、仏に対する帰依であり、自らも他者も仏に成っていく教えであります。つまり仏は釈迦一仏とは限りません。たくさんの仏がいるのです。

いろんな仏の在り方に対して考察され、仏身論のような考えが出てきたのであろうと思います。この仏身論についてはいろんな説があり

ますが、三身説を採るのが多いようです。それは応身仏(おうじんぶつ)・報身仏(ほうじんぶつ)・法身仏(ほっしんぶつ)という三種類に分けて考えるのです。

3. 応身仏と報身仏

応身仏というのは、歴史上存在した仏です。今から二千五百年ほど前にインドで存在した仏で、一般的にお釈迦様と呼んでいます。南方仏教の仏に対する理解と重なるものであり、いわゆるブッダです。

報身仏というのは、いかにも大乘仏教的な仏様です。その例として、阿弥陀仏があげられるでしょう。阿弥陀仏とは、法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)がすべての人間を救いとるという誓いをたてて、それが成就して仏となった姿です。

菩薩とは仏に成りたいと修行を始めた存在です。だから、阿弥陀仏とは法蔵菩薩のすべての人間を救うための修行が完成した結果なのです。私がいつもペアを組む近隣のお寺の若い住職がこんな話をしてくれました。そこの門徒さんの一人が「わしは、阿弥陀さんがいてくれないと困る」とおっしゃるのです。

その方は、息子さんを亡くされたそうです。阿弥陀仏の姿は、息子さんが救われていることを示しています。阿弥陀仏のように報身仏というのは、その教えを体現した姿であるとも言えます。

4. 法身仏

法身仏とは、「色も形もない真実そのものの体」『仏教語大辞典』と書いています。真理そのものを体現した存在であるというのです。応身仏も報身仏も仏像として描くことができますが、法身仏は色もなく形もないのですから、描きようがありません。私たちには極めて理解しにくい仏様であります。

私たちは、法要の始まりの時に三奉請(さんぶじょう)を読誦します。それは「弥陀如来」「釈迦如来」「十方如来」に対する敬意を表すものです。「弥陀如来」は報身仏です。「釈迦如来」は応身仏です。「十方如来」は法身仏かもしれません。十方とは私から見て、すべての方向を意味します。すなわち、私の直ぐそば、至る所にいる仏様であるのかもしれませんが。

5. ある老婦人の話

私のお参り先の話です。そのお宅は、山間部でお爺さんとお婆さんが二人で暮らしていました。息子や娘は都会でそれぞれの家庭を持って暮らしています。そこでは、ゆったりと時間が流れています。私は、そこにお参りをするのが好きです。そのゆったりした時の流れの空間に身を置くことに快さを感じます。しかし、過疎の村で暮らす夫婦にとっては、決して便利な生活ではありません。移動がしにくいところで、買い物や医療受診は容易ではありません。密な近隣関係は、相互扶助の利点がありますが、かなり大きな協調性が求められます。

ある日、そのご夫婦のところにお参りをして、お婆さんが「私はここに嫁に来る前の夜に、父親が『おまえ、つらかったら帰ってきてもいいぞ』と言ってくれた」と話してくれました。50年か60年も前の話です。それを、昨日の事のように語る老婆の顔は、とても輝いていました。この半世紀以上の間には、つらいこともあったでしょう。その時に、このお婆さんを支えたのは、父親の言葉であったと思います。

今となつては、帰る家もあるのかどうか分かりません。父親が存命であるかどうか分かりません。けれどもそれ以上に、父親の言葉は大きかったのです。この言葉は、父親の「おまえのことを、心配しているぞ」という気持ちでしょう。この父親の気持ちは、命を超越しています。生死を超越したものが仏であります。

ここで、私の友人の話をしましょう。彼の娘が結婚をすることになりました。私が彼に様子を尋ねると、奥さんと娘さんで楽しそうに準備をしていると言います。彼は「オレは黙って金を出すだけだ」と言います。私が、取りなすように「いつか、お父さんにも感謝してくれるだろう」と言うと、彼は「うん、オレが死んでからで十分だ」と答えました。

感謝は死んでからでいいなどと思えるなんて、私は胸が熱くなりました。彼は自分が死んでも娘のことを思い続けるつもりです。老婆の父親の気持ちも、友人の気持ちも同じで、何十年が過ぎようと変わることのない真実だと思います。

6. 母親の涙

友人の住職がしてくれた話です。そのご門徒さんの若い婦人が小さな娘の手を引いて、川の土手の道を歩いていたそうです。道の向こうから首にタオルを掛けたおじさんが歩いてきたそうです。すれ違い際に「お母さんは、偉いもんやなあ」と言って過ぎ去ったそうです。その瞬間、母親の両目には涙が溢れたそうです。何か特につらいことがあったわけではなかったそうですが、涙が溢れたそうです。

そのおじさんは寅さんかと言いたくなります。その人が誰であるかは不問にして、その言葉が誰の言葉でしょうか。母親は、仏様の言葉として聞いたのだと思います。仏様の言葉は、とても優しい言葉だと思います。そして、いつも優しく見守っているという眼差しが共にあるのです。

あなたの大切な人は、阿弥陀様に救われて仏と成って、あなたと共に

いるのだと思います。その仏は色も
形もないというのですから、あなた
の目には見えませんが、必ずあなた
のすぐ側にいるのだと思います。そ

こに真理としての仏様がいらっしゃるのだと思います。